

【KSU History】こんにちは！

第3回企画展「荒木雄豪の足跡－生誕100年－」に際して

本展では、本学名誉教授（故）荒木雄豪先生の業績を紹介するとともに、先生が関わられた大学業務機械化への取り組み等についても併せて紹介しています。今回は、かつて本学の計算機センター・情報センター（現・情報センター&DX推進部門）に4度（通算約10年）にわたり配属され、荒木先生と共に職務を遂行されていた入学センターの林秀美さん（現・嘱託職員（非常勤））に、当時のエピソードをお伺いしました。

【林氏】：私は1980年、本学事務職員として採用され、計算機センター（現・情報センター、DX推進部門）に配属されました。当時、本学には日本全国でも数台程しかなかった大型汎用機「TOSBAC」が導入され、続いて「DEC」や「FACOM」などの計算機も設置されました。これらの計算機を活用して、新しいシステムを次々と開発されていたのが、理学部の荒木雄豪教授（兼、計算機センター室長）と同スタッフでした。

荒木先生は、大学業務の機械化に熱心に取り組まれており、私もその一環としてプログラム開発業務に携わりました。例えば、音声を文字に変換する装置の原型のようなものがありました。これは、予め様々な語彙を学習させた上で、話者（私）のイントネーションや話し方の癖（速く話す部分やゆっくり話す箇所など）を機械が学習し、会話の内容を文字として出力するという、当時としては画期的な技術でした。

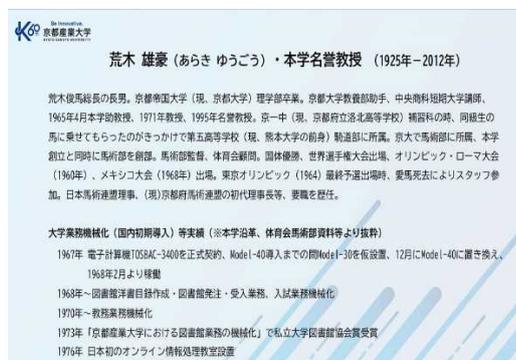
また、今では漢字で名前を画面上に表示するのが当たり前のことですが、TOSBACやDECの時代では1バイト文字（半角の文字：数字・アルファベット・記号）しか対応できませんでした。しかしFACOM導入以降は荒木先生のご指導のもと、漢字などの2バイト文字を扱えるようにされました。漢字のコード表から漢字を探し、4桁の16進数コードで入力していくので大変でしたが、漢字が画面に表示されたときには感動しました。

当時は、大型汎用機の開発企業から派遣された技術者も、荒木教授とともに研究に取り組まれていましたが、機器の不具合などで上手くいかないこともあり、夜を徹して修理作業を行うこともありました。当時の業務は私にとっても貴重な経験となりました。

第3回企画展では、本学業務の機械化を推進した荒木雄豪先生の足跡をたどる史資料を大学史展示室（4号館1階）で8/6（水）まで（土・日、祝日を除く）展示しています。詳しくは本学webページでご確認のうえお越しください。



国内最初期に計算機センターに配置された電子計算機 TOSBAC-3400



荒木雄豪・本学名誉教授略歴

※詳細は別添資料をご覧ください。



① 当時（1980年頃）のエピソードを語る 林氏



② 当時（1980年頃）の計算機センターにて